

# 私と「片付け」学

先月号で「片付け」の意味について書いたわけだが、そこでは、おもに子どもの「片付け」が中心になっていた。これは「幼児の教育」というこの雑誌の題名からして、そこに結びつけて論じなければいけないような気がしたからであった。

でも、書きながら考えたことであるが、この「片付け」という問題は、ひとり、子どもだけの問題ではなく、わたしたち大人にとっても、重要な問題でもあることに気づかないわけにはいかなかった。それで、そのままでは、どうも片手落ちのような気がしたので、そのことを編集部に申し上げたところ、それならどうぞということになり、大切な紙面をまたおかりすることになったわけである。今回は、前回の論を多少補足しながら、「片付け」のもう少し積極的な意味を、自分の経験に結びつけて書いてみたい。

田中 祐次



## 一、誤解されやすい「片付け」という言葉

前回、私は、片付けるということは、物事が進行する中で一つの区切りの時に起きてくるものだというように述べた。それまでの状況を振りかえり、さらに先を見通してそれにそなえるところに「片付ける」ということの必要性が生まれるということであった。それゆえ、ただ「片付けてせいせいした」というような片付け方は、「片付け」の本質にかなっていないし、子どもに片付けをさせるときにも、そうした未来への見通しと期待を与えてさせなければいけないと主張したのである。たしかに、子どもに片付けをさせる場合、「これからオヤツですよ」とか、「これからおもしろい紙芝居をしますから」とか言ってやると、がぜんピッチがあがるものである。だいたい、子どもに遠い未来を考えさせる

ことはむずかしい。まして、今が最高に楽しい時とばかり熱中しているのであればなおさらである。そんな時に「お客さんが来るから」とか、「散らかしているとみっともないから」とかいても、それは、彼にはかわりない他人ごとであるし、「食事だから」といっても、お腹がすいていなければ、いや、時にはすいていてもだめなことさえある。

いったい、「片付け」とは他人の目を気にしてやるものなのだろうか。この点で、最近の住宅事情は、親にとっても子どもにとっても大変な不幸である。来客の予定でもあろうものなら、親は朝から片付けに追われっぱなしで、子どもは片付けるそばから散らかす「散らかし魔」に見えてくる。いきおい邪魔者にされて追い出される。子どもが存分に散らかして（いや子どもにとっては散らかしているつもりはないのだが）遊びに熱中できる空間は家中にはないといってもよいであろう。

話はそれるが、この住宅事情の悪さは、子どもの躰けにも重大な悪影響をもたらしている。人前を会釈もなく横切ったり、臆面もなく物を踏みつけて何とも感じない行儀の悪さなども、考えてみればこの住宅事情の劣悪さからきているといえないでもない。人前を横切らなければ動きがとれないし、踏まずに歩くには、大人にもむずかしい程の器用な身のこなしが必要になる。だいたい

人前を横切るといっても、遠近の程度の問題だし、物を踏まずに曲芸のような身のこなしを無理にさせて、よろけてそこから体をぶつけられても困るので、つい大目に見てしまう。だからこそ、家の中は片付けておかなければいけないということにもなるのだが、これもまた、表面的な片付けになりかねない。それにしても、大変失礼な言い方かもしれないが、子どもが成人したころ、やっと退職金で家を建て、動きもにぶくなった年輩者が広い家に住むよりは、育ち盛りの子どもを持った若い夫婦こそが、他人に気がねせずに住める広い住宅を持つべきではなからうか。どう考えても世の中ひっくりかえっているような気がしてならない。

つい愚痴を述べたが、こうした住宅事情の悪さは、子どもにとってばかりでなく、そのまま大人にとっても「片付け」の本来の意味を誤解させてしまうことになりかねない。片付けることばかりに気をつかう母親、そのくせちょっと押し入れを開ければ何が入っているのかわからない始末で、これで片付けたというにはあまりに無秩序である。そんなところから、「片付ける」ということが、うっかりすると「ええい、片付けちゃえ」という人殺しの代用語のような無責任なニュアンスを生みだすのかもしれない。こうした「片付ける」という言葉の殺し屋的な使い方は、

あなたがテレビの見すぎからとばかりいえないであろう。まさに何事にもゆとりの無い現代の状況を反映したものと思われるのである。

## 二、受身的な「片付け」と自発的な「片付け」

ところで、「片付け」という言葉が誤って理解される原因として、すでに述べたように、それがとかく他から強制されて行なわれることが多いことがあった。わたくしたち大人が、子どもに「片付けなさい」という場合も、つい子どもの意志とは関係なく強制的に命令することが多い。このことは、わたくしたち自身にとつても同様で、「片付けなければならぬから片付ける」というように思い込んでいる場合が多い。それで、このことを子どもにも押しつけてしまうのである。「とにかく片付ければよい」、「片付けていさえすればよい」といった誤った発想は、こんなところから生ずるのではなからうか。

こうした受身的な「片付け」に対して、自発的な「片付け」というものは考えられないであろうか。「片付ける」ということが、大なり小なり「片付けなければならぬ」という事情で起きるものであることは確かとしても、そうした本来的に受身的になりやすい「片付け」を、どうしたら自発的で主体的な「片付け」にできる

であろうか。

幼い子どもたちの遊んでいる姿をよく観察していると、彼らは決してただ無秩序に遊んでいるのではないことをしばしば発見して驚かされる。そして、「片付ける」ということさえもが、遊びの中で見事に実践されていることに気づく。積木遊びが発展してままごとに移ったとき、積木は家具や壁になって片付いているし、それがさらに発展して乗り物ごっこに移ったとき、積木は自動車や電車に変身して再構成される。これこそ見事な片付け方だといわなくてなんであろうか。子どもたちが遊びの中で、しばしばこうした片付け方を行なっているのを見るとき、わたくしたちは、そこに「片付け」の本質を見る思いがするのである。「片付け」とは、なにも戸棚に整理してしまうことばかりではないのである。他人の目を気にして隠すことでもなければ、幾何学的に並べることでもない。それは、自らの必要に応じて創造的に物を生かすことだといえないであろうか。だとするならば、そのような片付け方こそが、自発的な「片付け」ということになるわけだが、これはあなたがち、単なる理屈とのみいえないように思う。

## 三、現代と片付け学

世は情報化時代といわれる。私の専門は心理学であるが、この

学問分野でも、年々、おおよけにされる論文や著書はますます増大する一方である。これらの情報を自分の研究にどう生かすかということは、私にとっても重要な関心事であり、そんなことから、いわゆる整理学は必要欠くべからざる技術となっている。知らねばならないことはますます多くなり、そのためには、調べるということの技術がますます必要となる。そして、それは必然的に、いかに調べやすく整理しておくかという問題に到達するわけであるが、昔は、そうした技術は、経験的に自分で工夫したり、他人のやっているのを見習ったりしたものである。私自身、恩師がやっているやり方をよく盗み習ったものである。

ちょうど十一年ほど前、中公新書で、加藤秀俊氏の「整理学」(一九六三年)、新潮社から藤川正信氏の「第二の知識の本」(一九六三年)などが出て、興味をもって読んだとき、なんと便利なよい本を書いてくれたのだと驚きとともに感謝し、整理学に熱中したことを今でも覚えている。その後、岩波新書で、梅棹忠夫氏の「知的生産の技術」(一九六九年)も出て、最近では情報整理や文献探索の方法を解説した本はかなり出まわるようになったが、いずれもそれぞれの著者の貴重な経験が紹介されており、得るところが多い。

「これらの本で共通していることは、「整理」ということが、結

局のところ、「生かすこと」を意味しているということであり、その点で、あらためて教えられるのである。

「片付け」ということは整理するということとほぼ同義にとつてよいと私は思うのであるが、はじめの方で述べたように、「片付ける」というとすぐ、捨ててしまおうとか燃してしまおうということとを連想するのと比較して、かなり意味がちがうような気がする。しかし、労働者の「首切り」を「人員整理」などというのを考えれば、いずれにしても「生かして使う」ための「整理」であり「片付け」であるという本当の意味を、わたくしたちはうっかりすると忘れてしまいがちなのだと思います。

ゴミ公害一つを考えてみても、それは、一見、物が豊富にあり過ぎていのように錯覚をおこしている現代人の、誤った片付け方の表われだといえないだろうか。ただ埋め立てたり、燃やしたりというような、自然を冒瀆した無責任なやり方がほんとうに「片付け」ことにはなっていない、ということを、今、わたくしたちは、いやというほど知らされているのである。

最後に、執筆の機会を与えてくださり、拙いこの小論が「片付け」ことによって、私もまた一つ成長したことを感謝する次第である。

(信州大学)